

「先祖」が照らす意味世界

金光教教学研究所 高橋昌之

1、はじめに

本日は、今年の紀要『金光教学』で発表した論文の内容をもとに、いま考えていることをお話ししたいと思います。論文では、金光大神のもとで「先祖」が感じ取られた場面に注目して、そこにどのような世界が現れていたのかを考えました。そこでまず、このようなことを考えた背景から述べてみようと思います。

○

さて本日は、午後から布教功労者報徳祭ならびに金光田保子姫三十年祭が仕えられます。申すまでもないことですが、教祖様によって開かれ、多くの先人のご苦勞があつてこのお道が今に続いています。そして教学講演会が開かれるこの場に、皆さん方が足を運んで下さいました。それぞれに思いがあられてのことと存じますが、考えてみますと、お互いこのお道にご縁がなければ、この場に集うことも無かつたと思います。

そのご縁のあり方は人によって様々でしょうが、そこには個人の力を越えた何かの力が働いております。私の場合は、信心をしている両親の元に生まれたことが縁となっています。そしてその両親もまた、それぞれの親がお道の信心をしていました。考えてみますと、私たちの暮らしというのはその時々で何らかの選択をしながら営まれると同時に、各々が生まれ育つた環境や周囲の人々など、様々な関わりによって導かれ、成り立っている面があります。人間という存在そのものが、関係性の産物と言つていいかも知れません。

その場合、生きている人間同士の関わりもありますが、既に亡くなつた人、たとえば自分の祖父母やそれより前の先祖との関係性も大きいように思われます。普段はそれほど意識していませんが、遠い先祖から続いてきた命あるいは魂といったものが、親から子へ、そして子孫へ、といった具合に繋がっていくイメージです。

しかし現在、このような考え方が一般的かという点必ずしもそうとばかりは言えないようです。一例をあげますと、ある大学の先生から聞いたのですが、現代の学生の多くはあの世とか魂などは信じていないということで、授業の中で「自分が死んだらお墓は要りますか」と質問したら、ほとんどの学生は「要らない」と答えるそうです。はっきりとは分かりませんが、肉体の消滅と共に人間は消えて無くなるのだから、死んだらそれでお終いということでしょうか。

もっともお墓を作ると言つてもそれなりの費用がかかりますし、せつかく作つてもお参りしてくれる人がいない、といった例も耳にします。墓仕舞いという事も聞きます。私自身は、従来のようなお墓にこだわるのではなく、それぞれの思いや事情に応じた形が模索されていいと思つています。ただそうとしても、いま生きている人間は亡き人との関わりでどう捉え返すことが出来るのか、と思わされます。本教に目を向けてみますと、例えば葬送儀礼では故人の御霊を丁重に弔い、遺族も故人との関係で自身を捉え直す営みとして大切にされてきました。しかし一方で、近年は遺族の都合によって旬日祭といった儀礼の執行が難しくなつている実際や、遺族による故人の御霊への実感が薄らいでいるのではな

いか、といった声も聞かれます。ここには葬送儀礼や先祖祭祀を仕える意味におよぶ問題が提起されていると感じます。

ここまで論文執筆の背景や関心を述べて参りましたが、このような事を考えながら私がまず興味を惹かれたのが、金光大神が先祖の精霊回向を仕えた時の出来事でした。これは皆さんよく知っておられることかと思いますが、安政五年七月十三日の夕刻、金光大神が先祖の精霊を迎えて精霊回向を仕えようとしていた時、金光大神の口を通して神や先祖が語り出したという出来事です。このように金光大神が神や先祖をその身に感じ取っていた時、そこにどのような世界が現れていたのか。そこから今に問い返されることを見ていきたいと思います。

## 2、先祖との関わりに浮かぶ人間

七月十三日、先祖精霊回向仕りと思い、早うに金乃神様へご奉灯、御礼申しあげ。私口へお言わせなされ。戌の年、今晚は盆と申うて、精霊回向へ気を寄せ。灯明、油少のうても火は消えん。はや、晩からなんぼうになりやあ。母妻ともここへ来い、物語いたして聞かせる、なにかお知らせあり。

ところへ、小田、八右衛門殿みえ、聞いて、常住このいに（このように）言われるかと問われ、今夜はじめてと申し。おやめに相成り候。私もさがり、同人に相対仕り候。用向きすみ、同人帰り。

私、祇園宮ご縁日にて、奉灯、ご祈念願いあげ。また金乃神様お知らせあり。家内中へ、うしろ（大橋家）本家より八兵衛と申す人、この屋敷へ分かれ、先祖を教え。戌の年さん、お前が来てくれられたで、この家も立ち行くようになり、ありがたし。精霊御礼申しあげ。次に、客人大明神、近江国よりまいり、この所おさまり、八百三十一両二年になり。墓所、氏子がそばへいたし、これを場所変えるように頼みます、と申され、私聞きおき。（「覚書」5—5）

### ○神や先祖による呼びかけ

この日、金光大神の口を通じて、金乃神、先祖、客人大明神らが次々に語り始めたと言われます。ここで金光大神は、神や先祖から「戌の年」「戌の年さん」と呼びかけられた、と受け止めています。場面としては金光大神が先祖の精霊を迎える日の出来事ですが、呼びかけられることによって、金光大神は神や先祖に捉えられ、そこに生まれた世界に触れることになったと考えられます。それはどのような世界だったのでしょうか。

私が面白いと思ったのは、神の指示で、養母や妻がその場に呼ばれていることです。

当時、精霊回向は一家の戸主が一人で行うのが一般的でした。金光大神が精霊回向を仕えている同じ時間、養母と妻は夕食の片付けや翌日の盆行事のしたくなどで忙しくしていたと思われます。神はその二人の手を止めて、その場に来るよう求めています。二人は途中になった仕事を気に掛け、げげんな思いを抱きつつ駆けつけたでしょう。

さて、母や妻を前にして神が語り出したのは、養家の先祖についてでした。大橋家から八兵衛という人が来て、二度も断絶した養家を再興したという内容です。実は、金光大神

はこのことを養父母から聞いて既に知っていたと考えられています。ここからは、二人がその場に立ち会わされるという出来事そのものの意味へと注目させられます。それは、金光大神の口を通じて神や先祖が言葉を発するという出来事が、養母と妻に象徴されるような日常の暮らしと交錯しており、その意味を明かすこととしてあったのではないのでしょうか。

この時、先祖は金光大神の口を通じて「この家も立ちゆくようになり」とお礼を述べています。その中には、当時であって既に名前が知れなくなった先祖も多く含まれていました。金光大神の口を通じて言葉を紡いでいたのはそうした先祖達であり、金光大神を通じてその場に現れています。また金光大神の側からすると彼らに感じ取られることで、その場に現れています。いろいろな声が重なり合い、自身に繋がる先祖の歴史が積み重なった存在として、一人の人間が現れていることが分かります。

そうしたとき興味深いのは、先ほど申した通りその場に養母や妻が呼ばれていたことです。このような形で一人の人間が現れていることが、この二人にとっても知っておくべき人間の有り様として示されている。そして金光大神と養母や妻にとって、目の前の世界や自分自身が、人知の及ばない存在と密接に関わるものとして見させられているのです。

### 3、墓地のあり方に浮かぶ問題

#### ○土地と人間の関係性

さて、このような形で現れた金光大神に対して、次に客人大明神から墓地を移動するように求められています。客人大明神というのはその大橋一族が祀ってきた神様です。いまは教祖奥城の向かって左側に祀ってあります。また移動を求められた墓地とは古くから、養家を初めとして大橋家につながる家の死者を埋葬してきた場所です。現在の教祖奥城の裏にあたります。

この客人大明神の言葉には、土地と人間との関係が暗示されているのではないかと私は考えています。申すまでもないことですが、どんな人もいつかは必ず死にます。そして死を迎えた肉体は、いずれかの仕方によってどこかの場所に収まり、以後その一隅を占め続けることとなります。それはたとえ海に散骨した場合でも同様です。養家を再興した八兵衛など、金光大神の先祖達も客人大明神が祀られてきた土地にある墓地に葬られ、体はその土地の一部となっていたでしょう。

先ほど、金光大神という一人の人間は先祖の歴史が積み重なっている存在だと述べました。そうすると、金光大神たち子孫もまた、先祖を介してその土地やそこを守っている神と切り離せない関係にあります。それは私たちについても同じ事が言えるのではないのでしょうか。しかし普段の生活において人間が、そのような自分と土地との関係を考えることは稀かも知れません。客人大明神による墓地移動の頼みは、このような人間のあり方を指摘しているように思います。今日であっても、たとえ故郷を離れて都会に暮らしていても、先祖が暮らし葬られた土地や、そこにある神と自分との関わりなどは消えようがないということでしょう。

#### ○先祖以来の無礼を我がこととして

さらに金光大神は同じ年の暮れ（安政五年十二月二十四日）に、土地と人間の関係を考えさせられるお知らせを受けています。それは、かつて養家が二度にわたって断絶した理由として、土地にまつわる金神への無礼があったという内容でした。そしてその無礼が、金光大神にとっても家族や飼い牛を亡くした「七墓」を招いたとされます。注目したいのは、そのような先祖以来の無礼を、金光大神が自身の無礼として受け止めようとした点です。

人間は生きていく中で我知らず触れてしまう問題があるようです。金光大神はそのことを先祖を介して知らされていますが、では暮らしの中で先祖とのどのような関係が求められたのでしょうか。この点について、明治二年に神様から告げられた「先祖の祭り」と内孫桜丸の死を事例に見ていきます。

#### 4、先祖を祭祀することと暮らしのゆくえ

##### ○先祖の祭り

金光大神は明治二年三月十五日に、「先祖の祭り」を仕えるよう神から告げられます。

巳三月十五日、当年より、先祖の祭り、毎年九月九日十日に、身内、親類、此方へまいらせ。

一つ、そのほか祝い、祭りは延引（中止）いたさせ。

一つ、親類勤めは子供にいたさせ、と仰せつけられ。（「覚書」17—2—1～3）

このようにお知らせでは、九月九日十日に身内や親類を呼んで先祖の祭りを仕えることが求められています。また合わせて、それ以外の先祖祭祀に関する祭りは行わないこと。親類付き合いなどは子供に任せることも述べられます。

「九月九日十日」という日付に注目しますと、金光大神自身が金光大権現の時代から続いてきた、金光大神の祭り日であります。神の使わしめである金光大神の祭り日です。そこで「先祖の祭り」とは、金光大神を通じて神の威徳が現される世界に先祖達を位置づけながら祭祀することが求められていると考えられます。また先ほど、遠い先祖以来の無礼を我が身に受けようとする金光大神の様子を窺いました。「先祖の祭り」では、その無礼を含めて神との間で捉え直されようとしたのではないのでしょうか。

その具体的なあり方について、再び「先祖の祭り」が登場する桜丸の死の場面に目を向けます。

##### ○先祖を祭祀することと暮らしのゆくえ

金光大神の内孫桜丸は、明治十四年閏七月二十四日に急死しました。まだ数え年四歳でした。その死について神は、桜丸の父である萩雄の祠掌としてのあり方を問題にしています（「祠掌五年」「お上でも見せしめ、回し俵ということあり」）。そして萩雄の「身代わり」として桜丸が死んだとされています。

当時、萩雄は大谷村の氏神社である賀茂神社の祠掌でした。そして地域住民の依頼に応じて様々な祈禱を行うなど、その存在は近隣によく知られていたようです。またその当時進められていた金神社の建築も、賀茂神社の付属舎という名目で認可されていました。そ

それは菘雄が賀茂神社の祠掌であればこそ可能になったことでした。また金光大神も菘雄の祠掌就任を喜んでいますが。このような菘雄の祠掌としてのあり方が問題であるとすれば、それは金光大神を含めた周囲の者達にとっての問題でもありそうです。

その後、神から桜丸を「先祖の祭り」で祭祀していくようお知らせがありました。

一つ、金光桜丸、五十日祭祭典です。世間には死んで難儀。此方には死んで先のおかげ。先ため、生まれ変わり、利口発明、寿命長久願。先で、むかわりの、年忌弔いとはいうことなし。先祖祭りに、九月九日十日、祭りいたしよし。（「覚帳」25—28）

桜丸の供養については五十日祭を区切りとして、その後は「先祖の祭り」で祭祀するよう指示されています。また世間一般では死を難儀と捉えるけれども、この方では先のおかげとも述べられています。

先に見た通り、先祖の祭りでは神の威徳が現れる世界に先祖を位置づけることが願われていました。桜丸についてもこの点は同様で、父菘雄は毎年の祭りでその願いを込めたでしょう。そして、そのような営みを続けていく中で、桜丸のことを願っていた人間が、実は「桜丸あつての・・・」という形で、自分自身を捉え返される時の到来が、神から待たれていたのではないのでしょうか。その時、先に亡くなった桜丸が金光大神や菘雄を導くよう神から差し向けられ、人間の根幹とも位置づけられる先祖としての意味を帯びていくように思われます。

人が生きる中で触れてきた無礼に関わる問題とは、金光大神や菘雄らに限られず、先祖を通して今の私たちにも見させられていると考えられます。そしてそれが神との関係で捉え直され続けることが願われています。

○まとめにかえて

ここまで見てきたように、今生きている人間は、見知らぬ先祖による歴史の堆積でもありました。私たちは、そのような先祖が生きる中で起きた神との関わりや、彼らが暮らし、葬られた土地と、自身との関係に思いを寄せ、神や先祖に向かう暮らしが求められていると思います。